

普及活動現地情報

「農業現場では、今」

平成 30 年 8 月号



【日高振興局】8/22 平成30年度「農トレ！ひだか」～第2回セミナー開催～
無人航空機「ドローン」について研修

和歌山県農林水産部経営支援課
(農業革新支援センター)

は じ め に

普及活動現地情報は、普及指導員等が行う農業の技術普及、担い手育成、調査研究、地域づくり等の多岐に渡る現場普及活動や、運営支援を行っている関係団体の活動、産地の動向等、その時々々の旬な現場の情報をとりまとめたものです。

それぞれの地域毎の実情に応じて、特徴ある普及活動を展開していますので、是非、御一読頂き、本情報を通じて、普及活動に対する御理解を深めて頂くと共に、関係者の皆様にとって、今後の参考になれば幸いです。

また、本情報については、カラー版（PDF ファイル）を和歌山県ホームページ内（農林水産部経営支援課：アドレスは下記を御参照下さい。）に掲載しており、過去の情報も閲覧出来ますので、併せて御活用下さい。

和歌山県農林水産部経営支援課ホームページ 普及現地情報アドレス

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070900/hukyu/>

検索サイトより、以下のキーワードで御検索下さい。



< 目 次 >

頁数

I 海草振興局	1 - 3
1. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】 ～「下津農業の将来を考える集い」開催に向けて～	
2. 市内産種ショウガの次世代生産性の検討	
3. 和海地方農村青年交流会を開催	
II 那賀振興局	4 - 6
1. 那賀地方いちご生産組合連合会総会・研修会を開催	
2. 紀の川市環境保全型農業グループが先進地研修を実施	
3. 那賀地方有機農業推進協議会の講演会が開催されました	
4. 新規就農者研修会を開催	
III 伊都振興局	7 - 9
1. 重点プロジェクト【省力化と新品種導入による柿産地の振興】 ～九度山町果樹研究会平成 30 年度研修会を開催～	
2. 橋本市生活研究グループ員が小学生に柿料理、郷土料理を伝承	
3. 農業技術講習会（野菜コース）開催	
4. 新規就農者現地研修会を開催	
IV 有田振興局	10 - 12
1. 広川町農業士会がドローン研修会を開催！	
2. 「辛みのないシシトウ」の育種検討会に参加	
3. 平成 30 年度有田地方生活研究グループ先進地研修	
V 日高振興局	13 - 15
1. 第 2 回経営発展セミナーが印南町公民館で開催！	
2. 平成 30 年度「農トレ！ひだか」～第 2 回セミナー開催～	
3. みなべ町農業振興協議会が 2 年ぶりに地区懇談会を開催	

Ⅵ 西牟婁振興局 **16－18**

1. 茶の防除指導を実施
2. ICT捕獲わな設置
3. ウメのすす斑病対策研修会を開催

Ⅶ 東牟婁振興局 **19－20**

1. 重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】
～イチゴ育苗圃現地研修（第3回セミナー）を開催～
2. 三津野地域活性化協議会等が稲刈り体験を開催

Ⅷ 農林大学校 **21－22**

1. 2年生沖縄県で県外研修を実施
2. 1年生三重県で県外研修を実施

Ⅸ 農林大学校 就農支援センター **23**

1. パイプハウス建て方に関する講義・実習を実施

X 経営支援課 **24**

1. 和歌山県農業士会連絡協議会が県外研修を開催

I 海草振興局

1. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】

～「下津農業の将来を考える集い」開催に向けて～

貯蔵・蔵出しみかんの産地である海南省下津地域は、個選や地域単位での共選が多く、生産・販売に対して異なる戦略を持っているため、産地全体として共通認識や目標をもって将来を見据えた取組を行うことが難しい。しかしながら、近年、農業後継者や労働力が減少し、産地維持が困難になりつつある。

農業水産振興課では、これらの背景をふまえ、下津みかん産地を次世代につなぐために将来ビジョンの共有化をはかりつつ、新たな担い手育成の仕組みや人づくりに着手し持続的活動へ展開させるべく、重点プロジェクトとして取り組んでいる。

下津町農業士会（会長：稲田充弘）では、4月10日の総会時に会員アンケート調査を行った結果、例年のような活動だけでなく地域に働きかける活動も実施したいとの意見のほか、後継者対策などについて、下津地域全体としてみんなで考えていくことが必要との意見があった。この結果をもとに今年度の活動について5月の県外研修時に話し合い、新たな動きをおこすきっかけづくりとして、個選、共選に関わらず、JAや行政も含めた農業に携わる関係者が参加した「下津農業の将来を考える集い」の開催を計画した。開催予定日は9月7日とし、組織や団体を越えた取組が必要であるため、海南省やJAながみねなどからも意見や協力を得ながら準備を進めている。その中で、農業士が主体となり、6月に約1000戸の農家について、農業経営の現状や後継者の有無、5年から20年後の営農状況などを調査し、将来の状況把握を行ったところ、20年後には農業経営者が半数以下となってしまうことが分かり、取組への認識を強くした。

また、同じ市内の海南省農業士会（会長：笹尾拓司）との合同企画として集いを開催することとし、検討会議を8月末までに5回開催し、グループディスカッションの運営方法や一般の農業者にも興味をもって集ってもらえる内容などについて検討を重ねてきた。

8月27日にも、打合せ会議を開催し、当日に向けた役割分担の調整やグループディスカッションのテーマ案などについて話し合いを行った。

当課では、9月7日の集い開催に向けて支援するとともに、開催後も産地全体として共有できる将来ビジョン作成の取り組みを推進していく。



集いの内容検討会議



海南市・下津町農業士会合同会議

2. 市内産種ショウガの次世代生産性の検討

和歌山市種生姜生産促進協議会（和歌山市、JAわかやま、県農、和歌山県）では、新ショウガ生産のための種ショウガの一部自給を目指し、栽培推進に取り組んでいる。

8月2日と9日は炎天下のもと、29年度に生産、貯蔵した市内産種ショウガと県外産種ショウガの両方を定植した新ショウガ生産ハウスにおいて、収穫調査を実施し両者の比較を行った。

この結果、市内産種ショウガは県外産種ショウガと比較して、新ショウガの肥大に大差は無く、病害の発生もみられなかったことから、種ショウガとして問題無いことを確認した。

今後も調査を継続するとともに、「種ショウガの充実度を高める栽培管理」「種ショウガ貯蔵中の芽上がり（萌芽）を抑え、貯蔵性を高めるための条件」についても検討する必要がある。



ハウスでの収穫調査



重量、形質等の調査

3. 和歌山地方農村青年交流会を開催

8月4日、和歌山地方農村青年交流促進協議会（会長：太田勝弘）と和歌山地方4Hクラブ連絡協議会（会長：峯本和幸）が共催で和歌山地方農村青年交流会を開催した。この交流会は、地域の農産物や伝統文化に関する体験交流を行うことにより、地域の魅力や農業・農村生活に対する理解と関心を深めることを目的として毎年開催されている。

今年度は、和歌山市、海南市などから女性9名、男性13名の参加があった。男性参加者のうち6名は和歌山地方4Hクラブ連絡協議会会員であり、他の参加者についても海草管内で農業をしている若手農家が参加した。海南市のブルーベリー園地にて収穫体験を行ったあと、JAながみねとれたて広場に移動し、ブルーベリーのジャム作りを行った。その後、地元の野菜を用いて懇親BBQを行った。参加者らは、地元でとれた完熟のブルーベリーの甘さに驚いていた。

この交流会に参加する前は、農業者に対し「年をとっている」「地味、年配の方が多い」というイメージを抱いていた女性もいたが、交流会に参加したことによって「若い方が多く、明るい」「明るく元気に農業を楽しんでいる」という前向きなイメージを持てた。

農業水産振興課では、今後も、両協議会の活動を支援しながら農業者と消費者交流の場をつくらせていきたいと考える。



ブルーベリーのジャム作り



懇親 BBQ

Ⅱ 那賀振興局

1. 那賀地方いちご生産組合連合会総会・研修会を開催

8月4日、那賀振興局で平成30年度那賀地方いちご生産組合連合会（会長：畑昌伸）の総会及び研修会が開催された。会員等28名の出席があった。

研修会では、県農業試験場の井口主任研究員から「イチゴのナミハダニの薬剤抵抗性調査結果について」、東主任研究員から「まりひめの栽培ポイント」について講演があった。

井口主任研究員から、5月に管内6カ所の圃場から採集したナミハダニに5種類の主要な殺ダニ剤を散布した検定結果では、ほとんどの圃場で効果の高い殺ダニ剤は1～2種類であり、効果のある薬剤があるうちに天敵を利用したハダニ類の防除に取り組む必要があるとの説明があった。また、東主任研究員からは、「まりひめ」の栽培ポイントについて、「さちのか」との違いを比較しながら説明を受けた。「まりひめ」の特性に合わせ、追肥重点型の施肥体系であることや摘果方法等具体的なポイントなどの説明があった。

研修会出席者からは、天敵導入した際の注意点やまりひめの育苗期の管理などの質問があった。

最後に農業水産振興課の今井普及指導員から「間欠冷蔵処理マニュアル」について説明を行い、研修会を閉会した。



総会



研修会

2. 紀の川市環境保全型農業グループが先進地研修を実施

紀の川市環境保全型農業グループ（会長：畑敏之）は、8月23日に先進地研修として兵庫県西区伊川谷町の澁谷（しぶたに）農園を訪れ、会員9名が参加した。

澁谷富喜男氏は、消費者と連携した有機農業産地の育成に尽力しており、その取組が平成27年度環境保全型農業推進コンクールの生産局長賞を受賞している。

有機栽培を導入した当初は、失敗を繰り返し苦しい状況が続いたが、消費者グループの買い支えがあったからこそ危機を乗り越えることができたとのこと。澁谷農園では試行錯誤の結果、現在では病害虫の発生サイクルの把握とその対策を確立しているため、殆ど失敗することなく栽培できている。

また、研修生の受入や技術研修会により有機栽培農家が育成されており、着実に後継者が増えている。

研修に参加した会員からは、無農薬で栽培するための勘どころや消費者グループとの値決め方法など、熱心に質問をしていた。

農業水産振興課では、当グループの活動を支援していくとともに、会員らの経営や栽培の参考となる研修会を今後も開催していく予定である。



熱心に質問する会員

3. 那賀地方有機農業推進協議会の講演会が開催されました

那賀地方有機農業推進協議会（会長：関弘和）は8月29日、有機農業を広めることを目的に講演会を那賀振興局で開催し、管内外から50名が参加した。

石川県のJAはくい営農部販売推進課長の栗木政明氏を講師として招き、JA事業として、自然栽培に取り組んでいる事例について講演があった。

栗木氏は、「奇跡のリンゴ」で知られている木村秋則氏に感銘を受け、ローマ法王にお米を献上したことで有名な高野誠鮮氏（元羽咋市職員）とともに木村秋則自然栽培実践塾を開講し、自然栽培の普及に努めてきた。

現在、JAと市役所が地方創生の最重点政策に農薬も肥料も使わない自然栽培推進を据えた農業振興協定を結び、「自然栽培の聖地」づくりに乗り出しており、JAが営農指導や販売、市が住宅・農地のあっせんや新規就農者への独自助成で後押しをしている。その結果、自然栽培に取り組んでいる生産者は、当初の8名から38名に増加しており、女性や移住者が多い状況である。

参加者からは、具体的な栽培方法や販路のを見つけ方など、多数の質問があり、熱心に聞き入っていた。

当協議会是有機農業を消費者や生産者に広く知ってもらうため、今後も研修会等を開催する予定であり、農業水産振興課も当協議会の活動を支援していく。



講演会



講師に質問する参加者

4. 新規就農者研修会を開催

農業水産振興課では、8月31日、那賀振興局において平成25年度以降の新規就農者向け技術経営研修会を開催した。参加者は農林大学校の社会人課程の学生含む20名。

今回は低コスト簡易ハウスでハーブ栽培に取り組む米田基人氏を講師に、活用事例と導入コストについて説明を受けた。

座学では米田氏が低コスト簡易ハウスを導入に至った経緯から、ハウスの規格（3m幅、棟高180cm）、導入費用（10aあたり約35万円）などの説明があった。

紀の川市の現地圃場では、栽培中のハーブを見ながら施設の説明がなされた。参加者は施設内の環境が既存ハウスと比較して作業しやすい事（風があれば外気とさほど変わらない＋1～3℃程度）や、施設の構造が簡素で設置・撤去が容易で借りた農地にも容易に導入できるなどの内容を聞き、熱心に質疑が交わされた。

当課では、新規就農者向けに継続した支援として、簡易ハウスの設置研修会や、イチジクの栽培導入に向けた研修会を今後開催する予定。



那賀振興局での座学



簡易ハウスの構造について説明

Ⅲ 伊都振興局

1. 重点プロジェクト【省力化と新品種導入による柿産地の振興】

～九度山町果樹研究会平成 30 年度研修会を開催～

8 月 22 日、九度山町果樹研究会（会長：道浦義彦）が研修会を開催し、会員 22 名と関係者が出席した。

はじめに、果樹試験場かき・もも研究所において、県のオリジナル新品種柿「紀州てまり」の栽培特性と、「刀根早生」の結果母枝先端せん除による省力化技術について、古田副主査研究員の説明を受けた。その後、研究所内圃場において「紀州てまり」の樹と結果母枝先端せん除の樹を視察した。

次に JA 紀の里総合流通センターにおいて、選果場の施設や取扱品目について説明を受け、その後、施設見学を行った。

出席した会員からは、「紀州てまり」の栽培特性や果実品質、結果母枝先端せん除の極早生柿や「富有」への適用、選果場の設備や取り扱い品目等について質問があり、今後の農業経営につながる情報収集に努めていた。

農業水産振興課では、「紀州てまり」の産地導入及び、結果母枝先端せん除による省力技術の推進に努めていく。



かき・もも研究所圃場視察



JA 紀の里総合流通センター視察

2. 橋本市生活研究グループ員が小学生に柿料理、郷土料理を伝承

橋本市生活研究グループ連絡協議会（会長：平田和美）では、橋本市立紀見小学校と三石小学校の要望により、8 月 2 日・3 日・16 日の計 3 回、柿カレーの調理やこんにやく加工体験の教室を開催し、延べ 12 名のグループ員が講師を務めた。

これは、小学校が夏休みでなければ出来ない体験活動や大人との交流を通じて豊かな心を育む事を目的に実施しているもので、生活研究グループは講師依頼を受けて参画している。今年は延べ 50 人の児童と、保護者やボランティア 7 人が参加した。

農業水産振興課の職員から原料の柿や料理について説明した後、生活研究グループ員が作り方を説明し、班に分かれて実施した。グループ員は積極的に調理に取り組む子ども達の姿に、引き続き郷土の味を通して食の大切さを伝えていきたいと張り切っている。

当課としては、グループ員が積極的に食育活動に取り組めるように支援していきたい。



こんにゃくづくりの説明をする会員



こんにゃくをこねる児童



柿カレーづくり



ねぎ焼きづくり

3. 農業技術講習会（野菜コース）開催

8月8日、伊都振興局において、農業技術講習会野菜コースを開催。受講生14名が出席した。

野菜コースは、今年度3回目で最終の講習会であり、農業水産振興課職員が夏秋野菜（タマネギ、大根、馬鈴薯、里芋、エンドウ）の育苗から収穫までの栽培ポイントについて説明した。

質疑応答の中で、受講生から省力的な馬鈴薯のマルチ栽培についての紹介があり、他の受講者から「体験話を聞けて良かった」等の感想や「新しい野菜、珍しい野菜も取り上げて欲しい」などの意見が出された。

今後、受講生の意向を聞きながら、講習会の進め方を改善していく。



講義する福塚主査

4. 新規就農者現地研修会を開催

8月21日、農業水産振興課は九度山町ふるさとセンターにおいて新規就農者現地研修会を開催した。新規就農者の栽培技術の向上と就農者相互並びに先輩農家との交流を図るため企画・開催したところ、新規就農者11名が参加した。

はじめに、九度山町の富有柿の園地において、JA紀北かわかみ甘熟富有柿部会の部会長中谷裕一氏を講師に、九度山町での富有柿園の管理方法、主に整枝剪定や土づくりについて研修した。

その後、九度山町ふるさとセンターに場所を移し、中谷氏の経営概要と甘熟富有柿「夢」「希」のブランド化について説明を受けた後、園地管理やブランド化の取組みに対する質問や相談が行われた。

参加者の中にはブランド化に発展できるような取組を行っている農業者もあり、それぞれの取組み等について意見交換が行われた。

また、終了後に実施したアンケートでは、「現地視察はすごく良かった」「ブランド化への取組みの話がすごく参考になった」という声があった。

当課は、今後も新規就農者の技術向上のため研修を行うとともに、交流を支援していきたい。



中谷氏（右端）による園地説明

Ⅳ 有田振興局

1. 広川町農業士会がドローン研修会を開催！

8月9日、広川町のJAありだ広川支所3階会議室と近隣水田において、広川町農業士会（会長：伊藤雅秋）がドローン研修会を開催し、町内の農業士の他、JA青年部員及び関係者など併せて21名が参加した。

今回の研修会では、XAIRCRAFT JAPAN 株式会社の住田靖浩営業部長を迎え、ドローンの基礎知識や農業利用についての講義と実演飛行が行われた。

講義では、ドローンとはどのようなものか、ドローンを飛ばすためには何が必要か、また、薬剤散布など農業利用の事例などの説明が行われた。

実演飛行では、場所を近隣水田に移し、完全自動化による農薬散布のデモンストレーションが行われた。

参加した農業士からは、「このドローン一機の価格はどのぐらいか」、「果樹には使用できるのか」など多くの質問が出され、ドローンへの興味の高さがうかがえた。

農業水産振興課では今後、研修会などの実施協力を行うことにより、地域の農業士活動を支援していきたいと考えている。



ドローン研修会（講義）



水田での農薬散布の実演

2. 「辛味のないシシトウ」の育種検討会に参加

有田川町ではシシトウが県内最多の約 6ha 栽培されている。形状の良さ、豊産性から「葵シシトウ」は現場での主流品種となっているが、ストレスを受けると辛味が生じ、その割合が多くなると消費者からのクレームに繋がるので問題視されている。

このことから、暖地園芸センターで育種中の「辛みのないシシトウ」を使って、今年度から有田川町内 5 か所で試作を始め、暖地園芸センターと協力して毎月品種比較調査を実施している。

8 月 28 日には暖地園芸センターで育種検討会が開催され、シシトウ部会役員らとともに参加し、有田川町と暖地園芸センターでの生育の違いや栽培管理方法についての情報交換や育種中の品種の形質等について検討を行った。

「辛味のないシシトウ」は慣行品種の「葵シシトウ」より品質、豊産性において劣るが、辛みを生じないといった優れた特徴を持っているため、当課では、栽培管理方法、販売方法などを検討し、現場での試作検討を重ね、辛味のない新しいシシトウのブランド確立を目指していく。



品質の検討



現地検討会

3. 平成30年度有田地方生活研究グループ先進地研修

8月31日、紀美野町において平成30年度有田地方生活研究グループ先進地研修を開催し、会員、関係者合わせて33名が出席した。

研修では、紀美野町中央公民館にて生石加工グループ副会長川内和子氏より「生石加工グループの取り組みについて」説明を受けた。会員らは、加工品の製造販売や、修学旅行生・ほんまもん体験の受け入れなど、精力的な活動内容に熱心に耳を傾けていた。

その後、生石加工グループ会員が講師をつとめ、和菓子づくり体験として「むしパンミックスで作る紅白まんじゅう」を作った。生地のコネ方や餡の包み方など、講師の手さばきを見ながら、会員1人1人が実習をした。完成後は、講師も交え、情報交換をしながら、試食を行った。

農業水産振興課では、今後も先進地との交流を行うなど、生活研究グループの活動活性化を図っていく。



川内和子氏より説明



和菓子づくり体験



むしパンミックスで作る紅白まんじゅう

V 日高振興局

1. 第2回経営発展セミナーが印南町公民館で開催！

県では、地域を担う強い農業経営体の育成を図るため、平成30年度新政策として「農業経営発展サポート事業」を実施しており、その一環として、8月20日、第2回目のセミナーが印南町公民館で開催され、61名が参加した。

セミナーでは、紀の川市の小川農園 小川真司氏から、農業の雇用創出産業化を目指した取組について、また、高知県安芸市の（株）はぐみ農園代表取締役社長 西内直彦氏から、施設環境制御による収量アップと法人化について講演いただいた。

講演後、「経営発展と担い手の確保について」をテーマに座談会を実施し、12名の農業者が参加した。

参加者アンケートでは、「農業経営の考え方や雇用について参考になった」「雇用の仕方や規模拡大に活用したい」「こういうセミナーが今までなかったので面白かった」などの意見があった。また、座談会では、経営発展の課題として、雇用・労働力確保を上げる声が多く、今後、施設環境制御のセミナー開催や経営者の話、法人化や社会保険に関する要望などが寄せられた。

農業水産振興課では、本事業を活用した経営相談や専門アドバイザーの派遣等を通じて、経営発展を望む生産者に対する支援を実施していく。



(株)はぐみ農園 西内氏の講演



講師を囲んでの座談会

2. 平成 30 年度「農トレ！ひだか」 ～第 2 回セミナー開催～

8 月 22 日、日高地方 4 H クラブ連絡協議会（会長：柏木研哉）と農業水産振興課の共催により、管内の若手の農業者や新規就農者等を対象とした研修会「農トレ！ひだか」の第 2 回セミナーを開催した。日高地方 4 H クラブ員他合わせて 21 名が参加した。

今回は、県果樹試験場うめ研究所にて、うめに関する試験研究の取り組みと、近年多岐にわたる分野で利活用されている無人航空機「ドローン」について研修を行った。

まず、うめ研究所の江畑研究員から、品種や栽培技術、果実の加工技術などうめに関する最新の試験研究成果について、講演いただいた。続いて、果樹試験場の熊本主査研究員から、「ドローン」の活用事例や現在進められている研究内容の他、運用に関する注意事項や法律について学習した他、飛行映像を確認した。農業現場におけるドローンの活用は、今は水稻への高濃度農薬散布が中心であるが、ドローンの性能向上と製造コストの低下が進んでいるほか、特定のカメラによる樹体の生育診断などが検討されており、今後ドローンの利用に向けた技術革新に期待が寄せられている。参加者からは、「購入価格はどれぐらいか？」「撮影画像を PC で見る方法は？」など、熱心に質問があった。

講演後は、うめ研究所の場内で、ドローンの試験飛行を見学した。熊本主査研究員が操作方法、飛行時の注意などを説明し、ドローンを飛行させた。初めて飛行する機体を見る参加者も多く、参加者はカメラやビデオに収めていた。「操作は簡単なのか」「かなり遠方でもちゃんと戻ってくるのか」「墜落の危険性は？」など、参加者から質問があった。

近年、飛行映像なども見る機会の多いドローンは、参加者の関心度は非常に高く、有意義な研修会となった。



うめについて講演を行う江畑研究員



ドローンについて講演を行う熊本主査研究員



ドローンの特徴や操作方法について
説明を聞く参加者



飛行中のドローンを見学する参加者

3. みなべ町農業振興協議会が2年ぶりに地区懇談会を開催

みなべ町農業振興協議会（会長：木下登吉男）では、農業振興団体への助成事業や幼児を対象とした食育活動、女性農業者活性化事業などに関係機関と連携して取り組んでいる。

平成26年度から3年間、地区懇談会を毎年開催し、生産者が考える町の将来像や課題、また自分自身の経営のめざすべき姿や、そのために必要なこと等について、各9地区でワークショップ形式により、意見を出し合い、集約・発表してきた。

当時は、青梅及び白干梅ともに販売価格が低迷しており、うめ専作経営が厳しい状況であったが、ここ1、2年は、テレビ等メディアの影響により、梅干消費が復調傾向にあるとともに原料うめの不作により、販売価格が堅調に推移している。

販売状況が好転してきている中で、各生産者の現状やこれからの課題などについて話し合うため、今年度、2年ぶりの開催となった。8月下旬から9月中旬にかけて町内全8地区で順次実施し、各地区における課題や意見を集約する予定である。

農業水産振興課では、今後とも当協議会の活動支援を通じて、みなべ町における地域活性化と課題解決に向けた取組を支援していく。



ワークショップによる意見出し



各班の意見を集約・発表

VI 西牟婁振興局

1. 茶の防除指導を実施

8月3日、白浜町市鹿野滝地区の茶の中刈り実証園において、農業水産振興課の明渡技師が園主の清水哲治氏と地域おこし協力隊の福永光展氏に茶樹の防除指導を行った。

この実証園は5月末に中刈りを実施し、夏期に生長する夏秋梢が10–20 cm程度伸長している状況である。

茶は、夏秋梢の光合成によって蓄えられる養分が、翌年の一番茶芽の養分となる。このことから、夏秋梢の状態が翌年の茶の品質に直接影響する。

夏秋梢が病虫害を受けることで、樹勢の悪化や収量の減少、品質の低下を招くことがあるため、夏期に適切な薬剤を散布して病虫害を防除する必要がある。

今回は、夏秋梢3葉期目が防除適期である害虫のマダラカサハラハムシとカンザワハダニの発生が確認されたため、防除を行った。

防除作業後は、秋期に行うべき防除と夏秋梢の生育の重要性を説明した。

今後も、生産者と一緒に茶樹の生育状況を確認し、樹勢維持のための適期における栽培管理を行うよう指導していく。



中刈り実証園



左写真：マダラカサハラハムシの被害

（食害で枝や葉に穴を空ける）

右写真：カンザワハダニの被害

（吸汁によって葉が赤くなる）

2. ICT 捕獲わな設置

8月9日、すさみ町周参見地区において、太間地有害獣捕獲組合（組合長：阿部集）が、すさみ町と農業環境・鳥獣害対策室、農業水産振興課の協力のもと、ICT捕獲わなを設置した。当町ではサル、シカ、イノシシなどによる農作物の被害があり、特にサルの被害防止対策に苦慮している。

県内では、「ICT捕獲わなを利用した捕獲技術現地実証事業」を活用してICT捕獲わなが設置されており、管内では6基が設置されている。

今回のICT捕獲わなは5メートル四方の大型わなで、ゲートには獣の出入りをカウントするセンサーが設置されており、設定頭数になるとゲートが閉まる仕組みとなっている。

村畑普及指導員らが設置の手順やICTトリガー装置等について説明し、組合員ら参加者10名が3時間かけて設置した。当面は、有害獣をわなに慣れさせるために、野菜などの餌を置き、餌付けをしていく。

また、センサーカメラを設置していることから、今後は、わなへの出没状況を確認して捕獲に取り組む予定である。



設置作業



ICT捕獲わな

3. ウメのすす斑病対策研修会を開催

8月22日、農業水産振興課はJ A紀南鮎川支所で開催されたJ A紀南生産販売委員会において、今年産のウメに多発して問題となったすす斑病の対策研修会を実施した。なかへち地区（旧中辺路町、旧大塔村）内のウメ生産者約40名が参加した。

かみなか
上中生産販売委員長から開会の挨拶があり、続いて、J A紀南栗栖川支所の寺本支所長から今年産の販売状況について、資料に基づき説明があった。6月中旬以降にすす斑病が多発し、青梅でもジュース等加工用の割合が増えたことが報告された。

研修会では、前田普及指導員から今年の気象について、気象庁栗栖川観測所データを用いて説明した後に、すす斑病菌の発生生態や発生状況、防除対策について説明した。参加者はメモをとるなど熱心に説明を聞き、有効な防除薬剤の組み合わせなどについて、活発な質疑応答が行われた。最後に薬剤防除だけではなく、ウメの管理作業で最も重要なせん定や間伐、防風樹の手入れなど基本管理を徹底し、ウメ園の環境改善にも併せて取り組んで欲しいと伝えた。



研修会

Ⅶ 東牟婁振興局

1. 重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】

～イチゴ育苗圃現地研修（第3回セミナー）を開催～

8月6日、那智勝浦町苺生産組合（会長：杉浦 仁）は、イチゴ「まりひめ」の栽培技術向上を図るため、育苗圃現地研修（第3回イチゴセミナー）を開催した。

当日は、生産者11名（うち新規就農者3名、就農希望者1名）、JAみくまの職員4名、農業水産振興課2名が参加し、各生産者の育苗圃場巡回や意見交換会を行った。

育苗圃場巡回では、生育状況、病害虫の有無などの確認を行った。圃場により差はみられるものの、全体として採苗時期が遅く、子苗の生育に遅れがみられた。また、一部の圃場では炭疽病の発生がみられた。

現地研修会後は、JAみくまの太田営農センターにて意見交換会を行った。当課職員、JAみくまの営農指導員からは、これからの栽培ポイント（炭疽病・うどんこ病などの防除法や苗の管理）の説明を行った。

また9月に花芽検鏡（第4回イチゴセミナー）の実施することを伝え、その結果を基に適期定植を行うよう指導した。

当課では、関係機関と連携しながら、栽培技術の向上や新規就農者の育成など、那智勝浦町苺生産組合の活動を支援していく。



新規就農者が育苗しているハウスでの
現地検討会

2. 三津ノ地域活性化協議会等が稲刈り体験を開催

8月28日、近畿大学附属新宮中学校の1年生48人を対象に、三津ノ地域活性化協議会（会長：下阪殖保）及びJAみくまの、農業水産振興課が連携して稲刈り体験を行った。同校生徒が本年4月26日に田植え体験を行った新宮市熊野川町の水田において、稲刈りを行った。

下阪会長から、「8月23日の台風により、熊野川の水位が上がって水に浸かってしまったが、皆さんが頑張って植えた稲はおいしくできあがっている。」と開会のあいさつがあり、その後、当課木村技師から稲刈りや米の調整作業等について説明を行った。

生徒たちは、JAみくまの営農指導員から鎌の使い方の説明を受けた後、稲刈りを行い、数名についてはコンバインに乗って刈り取り作業も体験した。その後は収穫した粳を乾燥・粳摺りする施設の見学を行った。

生徒からは、「あの暴風雨の中、踏ん張った稲はすごいと思った」「お米を作る大変さが分かり、お米の大切さが分かった。これからは残さず食べようと思った」等の感想があった。

刈り取った米は近大附属新宮中学校の文化祭で「近中米」として販売される予定である。



収穫・調整作業の説明



稲刈り体験

VIII 農林大学校

1. 2年生沖縄県で県外研修を実施

7月30日～8月1日の3日間、沖縄における農産物直売所の販売戦略と熱帯地域の農業を学ぶことを目的に県外研修を実施した。

ファーマーズマーケット「はい菜！やんばる市場」を訪れ、上間悟氏アドバイザーからファーマーズマーケットの特徴、基本理念、地域の特産品、JAとの連携等について説明を受けた。

学生からは、沖縄特産農産物の「島かぼちゃ」「パイナップル」「マンゴー」「ゴーヤ」の栽培特徴や来客数を増やすためにどのようなイベントを実施しているかの質問があった。

また、学生は和歌山県では高級フルーツとして高価で売られているマンゴーが産地では安く売られていることに大変驚いていた。

今回の研修で学生の農業に対する視野が広がり有意義な研修となった。



ファーマーズマーケット
「はい菜！やんばる市場！」



店内の見学

2. 1年生三重県で県外研修を実施

8月2日～3日の2日間、三重県において農業分野での先進的な取組をテーマに研修を行った。

「植物工場三重実証拠点」ではトマト、イチゴにおける高度環境制御技術・周年出荷体系・省力化技術について、「三重県農業研究所」では獣類の生態に基づいた適切な被害防止や捕獲技術について、「伊賀の里モクモク手作りファーム」では観光農業や6次産業化のあり方についてそれぞれ説明を受けた。

特に、モクモク手作りファームでは約30年前にソーセージ教室を始めたのをきっかけに、直売・通販・レストラン経営まで事業展開させ、現在はスタッフ数1000人、年間来場者数50万人へと発展させたことにとても驚き、農業の可能性について考える機会となった。



太陽光型植物工場のトマト栽培



モクモク手作りファームの取組説明

IX 農林大学校 就農支援センター

1. パイプハウス建て方に関する講義・実習を実施

8月21日、農林大学校就農支援センターでは、社会人課程（離転職者等職業訓練（農業科））と技術習得研修（第1班）の研修生を対象にパイプハウスの建て方についての講義と実習を実施した。

研修生は、午前の講義で施設栽培を行う目的や利点、パイプハウスの構造や建て方などについて学んだ。講義で理解を深めた後、午後からはパイプハウス建設の実習を行った。

学んだことを実践できるとあってか、研修生の姿は生き生きとしており、汗を流しながら懸命に実習に取り組んでいた。

パイプハウスの建て方や構造を知っていると、施設栽培を始める際に、自力で建設や修繕ができるようになりコスト削減につながることから、当センターでは研修生を対象としたパイプハウス建設技術の習得を支援していく。



パイプハウスの建設実習

X 経営支援課（農業革新支援センター）

1. 和歌山県農業士会連絡協議会が県外研修を開催

和歌山県農業士会連絡協議会（会長：山崎明）は8月30日～31日の日程で、石川県小松市、岐阜県高山市で県外研修を行った。当日は借り上げバスで、西牟婁振興局を出発し、日高、有田管内の参加会員を乗車させながら、最終、和歌山駅東口を午前8時前に出発。参加者は会員26名、県職員8名の34名となった。

研修初日の石川県小松市では、施設野菜を栽培している本田農園において、南加賀農林総合事務所の小谷担い手支援課長から小松市における施設野菜の産地概要について、本田農園の本田雅弘氏から経営内容や、労働力の確保対策、経営方針について説明を受けた。本田氏は千葉県農事組合法人和郷園での勤務を経て、平成15年に自身の地元である小松市で新規就農し、現在はトマト、四葉キュウリなどを中心にハウス53棟、約85aを経営。昨年度は、中日新聞社の第77回中日農業賞で優秀賞を受賞している。研修参加者からは、水田地帯の中で水田を埋め立てハウスを建設するなど、本田氏の行動力に感心する声が聞かれた。

翌日の岐阜県高山市では、小屋垣内農園において、飛騨農林事務所農業普及課の矢嶋係長からハウレンソウ産地概要について、小屋垣内浩之氏から水耕栽培のサラダハウレンソウや土耕のハウレンソウ栽培の特徴、経営概況や販売対策、労務管理等について説明を受けた。

小屋垣内氏は、ハウレンソウ170a、サラダハウレンソウ30a、中玉トマト、観光イチゴなどを経営しており、サラダハウレンソウの販売面では、袋あたりの入り数や出荷数量など販売先からの要望に細やかな対応を行い、販路を拡大している。

ハウレンソウについては、年間4.5回転させ、作業効率を最重要視しており、機械化を進めるなどして収益性を高め、平成28年度全国優良経営体表彰の農林水産大臣賞を受賞している。研修参加者は、小屋垣内氏からハウレンソウの栽培管理方法を聞きながら、防除回数など和歌山県との違いを確認したり、農研機構などが開発を進めているハウレンソウの下葉取り機などについて質問していた。

今回の研修は移動時間の長い行程であったが、参加者らはバスの中でもそれぞれ情報交換しながら交流を深めていた。



本田農園（石川県小松市）



小屋垣内農園（岐阜県高山市）

普及活動現地情報 発行・編集

和歌山県農林水産部経営支援課	TEL073-441-2931	FAX073-424-0470
海草振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL073-441-3377	FAX073-441-3476
那賀振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0736-61-0025	FAX0736-61-1514
伊都振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0736-33-4930	FAX0736-33-4931
有田振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0737-64-1273	FAX0736-64-1217
日高振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0738-24-2930	FAX0738-24-2901
西牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0739-26-7941	FAX0739-26-7945
東牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0735-21-9632	FAX0735-21-9642
和歌山県農林大学校	TEL0736-22-2203	FAX0736-22-7402
和歌山県農林大学校就農支援センター	TEL0738-23-3488	FAX0738-23-3489